誌上行学講習会

高佐日煌上人

実際この歌は人間の究竟目的を言い得て妙であります。いつの場合も人の願うものは同じであるということの証拠でもありましょう。「ションガイナションガイナ」というのは、自由を願っているが叶えられない、しょうがないなしょうがないなという意味ですが、逆に言えば常に自由がほしい自由がほしいという訳であります。

そういうわけで私も一生懸命聞かせ上手の役に立ちますから、皆さんもうんと聞き上手になって真剣に学びとっていただきたいと思います。

「一、自分の住んでいる社会の実相を知り、自己の立場を省ることは、究竟目的に対して如何なる方法目的を用いつつあるかを知る最も良き方法である。仏教は十界の社会観を立て、是を六道と四聖に区別する。」

先ずここから考えて参ります。我々の住んでいる世の中の本当の、ありのままの姿を客観してみる。客観とは向うに置いてみることを言います。ですから自分を客観することも出来ます。自分を向うに置いてみればよい。自分が一歩退って社会を客観して眺めますと、自分のやっている事がよく解って参ります。今自分は社会のどの辺に居るかを見つめるのが此の社会観であります。仏教では此の世の中即ち社会を十に区別して考えてみます。これを十界と呼び、下の方から数えて見て「六道」上の方を「四聖」といいます。「六道」は迷いの世界、「四聖」は悟りの世界と二大別して考えております。ナンバーがついていますが①は一番低いところという意味であります。

」

①地獄―犯罪常習者の社会
②餓鬼―乞食浮浪人の社会
③畜生―淫売陰間等の社会
④修羅―不良暴力団の社会
⑤人間―庶民大衆の社会
⑥天上―貴族富豪の社会
⑦声聞―学者知識人の社会
⑧縁覚―孤高隠逸人の社会
⑨菩薩―行道慈善人の社会
⑩仏陀―偉聖象徴人の社会

六道（迷いの世界）

四聖（悟りの世界）

①の地獄とは即ち地獄界のことでありますが、これを現実の世の中にあてはめて考へてみますと犯罪常習者の社会ということになります。言いかえれば刑務所を常のすみかとする人々の社会、泥棒とか、サギとか、スリとか悪事を働いている人これは或る意味から別社会を構成していると言えます。出来心で万引をするというのではなく、もう専門に泥棒し、スルという類で、名称までちゃんときめられています。汽車や電車の中で物を盗むのをハコシ、フロバで物を盗むことを板の間かせぎ、家の中に忍び込むのを忍び、留守中に物を盗むのを空巣ねらいというように呼ばれております。尚親分子分の組織がはっきりしています。昔の大スリ仕立屋銀次が検挙される前は警察もこの組織を利用したというような話もあります。或る有名な人がカバンをスラれた。金は仕方がないが中に入っていた重要書類だけは何としても欲しい。探してほしい等と言われた時、警察が銀次親分に事情を話しますと、銀次親分が子分を取り調べてその重要書類を発見する。こんなことがあったようであります。勿論今日では泥棒団体は無くなりましたが、これらの社会が地獄の衆生といえるのであります。

（次号へ）